

カーラチャクラの教えを通してみる近代のチベット密教

高松 宏 寶

(クンチヨック・シタル)

はじめに

我々の世界は近代から現代において、科学と経済は目覚ましい発展を遂げ、二度の大戦や冷戦を経験し大きな変化をたどった。こうした中で特に欧米社会はこれまでの価値観に疑問を感じ、次第に世界平和や心の安定、安心感などといったスピリチュアリティを求めるようになっていった。

これと時期を同じくして、チベットにおいても国の事情が一転し、ダライ・ラマ十四世（以下ダライ・ラマ法王）は亡命を余儀なくされる。その結果、チベットの代表的な仏教の教えの一つであるカーラチャクラと灌頂儀軌がチベットの外の社会にもたらされ、西洋社会と出会うこととなった。近代、そして現代の人々の世界平和への思いと、伝統的なカーラチャクラを持つ神秘的な側面への関心とが合わさった結果、この教えに世界中の多くの人々が興味を持ち、灌頂への参加者が増加していった。ヒマラヤ、中央アジア、特にシャンバラという地に対

する神秘的期待感も大きな要因と言えよう。こうした西洋社会からの期待が、チベット密教の伝統と近代化のブレンディングの要素の一つとなつていったのである。

今回私は、このカーラチャクラの教えとダライ・ラマ法王の灌頂儀式の意義に基づいて、チベット仏教がいかにして欧米社会と出会ったかを論じていきたい。

一 近代におけるチベット仏教の流れとカーラチャクラ

一九五九年のチベットにおける政治的な激変により、チベット仏教とその伝統は多大な影響を受けた。それ以前の前チベット国は厳しい鎖国方針の下、外国、特に西洋世界に対して門戸を開いていなかった。それは、チベットがインドから受け継ぎ永きにわたって育んできた精神的伝統を、西洋文明の影響を安易に受け入れずに純粹に継承していききたいという理由からであった。しかし一九五九年のダライ・ラマ法王と多くの人々の亡命によって、これまでの保守主義の考えを存続することは不可能となり、チベット仏教の伝統においては、極めて困難な状況と大きな変化がもたらされたのである。

チベット自治区内では共産主義のイデオロギーによる大きな変化を余儀なくされる現象が起こり、亡命先のインドやネパールでは、当時一万人以上の亡命者がチベット仏教における伝統をそのまま継承することができなくなった。具体的に見てみると、それまでのチベットでは、高僧や寺院には各々の信者、施主、檀家があり、そうした制度は数百年間成り立ってきたが、亡命先ではそれらを一時的にすべて失ってしまった。ネパール、インド、ブータンなどにおいては、国際的な援助などにより、生活面ではある程度定着することができたが、宗教活動によって生活を支える基盤は失ってしまったのである。

一方、一九七〇年代の世界情勢に目を向けてみると、その時代を生きた欧米の人々と、変化を余儀なくされていたチベット仏教が出会ったことも注目すべき点である。この時期、アジアへのヨーロッパの植民地支配の時代は終焉を迎え、引き続きアメリカからの関与が大きくなっていったと同時に、東南アジアなどで戦争が繰り返され、特にベトナム戦争長期化の結果、多くの若者達が反戦運動に関わるようになっていた。資本、共産のイデオロギーの戦いは激しさを増し、社会情勢は大きな変化に直面し、アメリカの資本主義と、ソビエトの共産主義のプロパガンダがますます強化されていったのである。

こうした状況の中、西洋社会の多くの若者達は自国の政策や社会制度に疑問を持ち始め、アジアに意識を向けるようになっていった。内面的な心の平和、アジア特有の精神性やスピリチュアリティ、そして神秘主義に興味を持ち、アジア諸国に足を運ぶようになったのである。戦争では敵国だけでなく同胞の犠牲者も数知れない。自分達に良い結果がもたらされ、平和で幸せになるはずであるのに、そうはならなかった。それでは戦争をする意味がないのではないかとといった、自国の政策に裏切られた感覚を持ったのだ。それゆえ精神的安寧を求め、結果的にアジアの伝統、神秘主義に流れ着いたのである。彼らが足を運んだのは、インド、ネパール、タイ、スリランカなどであった。そこでは「彼らの求めているところは、インドのヨーガ、日本の禅、チベット仏教の密教」などとよく言われ、一般の欧米の若者達が期待を込めてさまざまなアジアの国にやってきた。俗に言われるヒッピーの時代でもあった。そこで彼らは、「秘境」、「神秘の国」というイメージを持つチベットの密教や高僧達と出会っているのである。

先ほど記した通り、高僧や僧侶達は亡命先での生活を余儀なくされていたが、ここで外の世界、すなわち西洋社会や近代社会に対して、仏教、特に密教を伝える機会を得ることになった。とは言え、高僧達にも迷いが無い

わけではなかった。なぜならそれは、自国において強く価値を求め実践してきた体験や精神的な内容であり、かつ仏教の基本的知識と実践的な基盤があつてはじめて開示されるものであるため慎重に伝える必要があると感じていたからである。

密教では、未熟な者や信仰を持たない者には教えを説くべからずという伝統がある。密教の教えと修行は、長く篤い信仰と修行を積んだ者、すなわちごく少数の学僧と修行者以外には見せてはならなかった。解釈の上に解釈を重ねてきた密教の概念と意義を、仏教文化の歴史を持たない多くの一般の人々にどのように語るべきかというジレンマがあつた。

しかし同時に、チベット仏教の伝統や思想を革新させていかななくてはならないという意識もあつた。こうした点からダライ・ラマ法王や高僧達が意識してきたことは、仏教は精神科学であるという立場から、人々の悩み（煩惱）をなくすために、より範囲を拡大して、多くの一般の人々に教えを伝えても良いのではないかということである。さらに、これまでの閉鎖性により、チベット密教は西洋社会に誤解されているということもわかり始めてきた。これは、特に後期密教の部分において顕著な事柄である。従つてダライ・ラマ法王は、密教を秘密にして隠すよりも、理解されるレベルで解説したほうが良いと考え、チベット仏教の伝統を少しづつ崩してきたと言えるだろう。繰り返しになるが、ここで大きな問題となるのは、後期密教すなわち無上瑜伽タントラの部分である。俗的な捉え方をされ誤解されてきた。ダライ・ラマ法王はカーラチャクラの灌頂を執り行う際には、一連の行事の中心として、灌頂の儀軌とその解説、背景となる仏教哲学の解説を十分に行うように努めてきた。

二 なぜカーラチャクラの教えを選ぶのか

ダライ・ラマ法王を始めとするチベットの高僧達が大勢に対し灌頂を授ける場合、なぜカーラチャクラなのか。これは伝説に基づいた伝統によって、カーラチャクラの儀軌と伝授は大勢の参加を認めて良いとされているからである。カーラチャクラの経典は、釈尊自身がシャンバラの王であるスチャントラの願いにもとづいて、大勢の人々とその社会の平和と安定のために説かれたと伝えられている。従って釈尊がカーラチャクラを説いた意思にもとづけば、さほど厳しい条件を付けずとも、興味や関心があれば、今日の世界平和のために執り行っても密教の教えに反することはないという考えがある⁽¹⁾。ダライ・ラマ法王自身も、

「カーラチャクラの教えは世界平和への方便である。」

「多くの誤解のもとで、すでに開かれた秘密になっている。だから、これらを修正するのは私の責任である。十分納得できる深い解説が必要である。」⁽²⁾

「歴史的には、このカーラチャクラの儀軌は多くの人に与える伝統がある。昔のコミュニティというのは、山、川、谷、海によって隔てられていたが、今日は、高速のコミュニケーションと移動技術によって、我々のコミュニティは地球全体であると理解している。そういう意味でカーラチャクラの教えは、我々の時代の教えである⁽³⁾」と述べている。今の時代、世界の平和と安定を達成させるためには、カーラチャクラの教えだけではなく、政治と経済とさまざまな宗教の力、そして当然ながら近代科学の知恵も使う必要がある。従って、人類全体の普遍的な責任に基づいて世界平和を願うためであれば、カーラチャクラに参加する動機として適合するのではないだろうか。責任を持って地球を残すために、カーラチャクラに興味を持ったたり、参加したり、学んだりすることは、

欲望的なことでも利己主義でもない。こうした意味合いから、カーラチャクラを大きなコミュニティーに授けても、伝統的な意思からは外れないという判断があった上で行われてきたのである。そして今の時代にこそ、多くの人々のために釈尊の聖なる教えを伝え広めていこうという願いがある。

三 カーラチャクラの教えについて

ここでは、カーラチャクラの教えは何なのかということと、それを解説するにあたり不可欠の「シャンバラ」の存在について言及したい。

カーラチャクラ・タントラは、非常に複雑な後期密教の中でも、最後に伝えられた經典である。シャンバラの王であるスチャントラが勧請した意思に基づいて、釈尊が南インドのダーニヤカタカという仏塔の中で説いた教えとして、根本テキストが出来上がったと言われている。そのタントラが十世紀にインドで再発見され、翻訳してチベットに伝えられたとされるので、もとはサンスクリット語である。チベット仏教においては、プトウンをはじめとして、ツォンカパの直弟子であるケートゥプ・ジェ、ダライ・ラマ一世の直弟子であるケートゥプ・ノルサン・ギャツォ、ダライ・ラマ七世などによる研究の著作が残されており、その内の多くの文献がチベット大蔵經に収められている。

省略したラク・タントラの中では、内容は五品に分けて説かれている。

まず第一は「外的な世界品」である。ここでは宇宙觀を説明している。誕生と消滅の次第、それらの特徴、大きさなどである。我々の惑星、星座、星などの成り立ちも説明している。基本的に、これらは須弥山を中心に成り立っている宇宙で、地下は地水火風の四大が基盤となっており、その上に惑星と星座などがある。カーラチャ

クラでは、外的な宇宙も有情の業の結果によって成り立っていると説明しているので、カーラチャクラの観想と修行によって浄化すべき対象であると考ええる。そういう意味で普通のタントラと違い、器世間も説明する。

第二は「内的な有情品」。ここでは生命のある者、すなわち有情はすべて六大（地水火風空智）で成り立っていると説いている。そして、他の後期密教經典と同様に「金剛なる身」のチャクラ、風、滴、脉管といったことを解説している。六大の理論ですべて成り立つというのが、カーラチャクラの主張である。曼荼羅も非常に美しく、外は六輪に囲まれている。

第三は「灌頂品」。他のタントラと違い、「七つの子供の如くの灌頂」と、その上の四つの灌頂を合わせて十一もしくは十五の灌頂で成り立っている。儀軌の目的は、修行者達が生起次第と究竟次第の実践をするための資格を得ることである。

第四は「成就品」。生起次第と究竟次第のヨーガ的な実践を説いている。この部分に関しては、他の後期密教と大きな相違点はない。

第五は「智慧品」。カーラチャクラでは、悟りを「マハームドラーの智の達成」と呼んでいる⁽⁴⁾。

実践的に考えると、第一品と第二品で説くマクロとミクロのコスモスを、第三品と第四品の手段によって浄化させていくという内容である。カーラチャクラにおいては、すべての現象や世界の根源的な原因は極微な粒子であり、極微によって我々の内外の宇宙が出来上がってくるという説明がなされる。我々の宇宙が発生する時には、四つの段階がある。まず「空」の時期には、四大はすべて極微な粒子であり、切り離れたバラバラの状態である。人間の目では見ることができないものであり、物質でありながら物質の特徴を持っていない。これがすべての基である⁽⁵⁾と考える。そして時代の変化によって「風」になり、その結果「火」になり……「地」になるという変化

があり、消滅はこの逆である。ここは、カーラチャクラが宇宙觀を論理的に説明している興味深い部分であり、近代科学の宇宙理論におけるビッグバンやブラックホールの概念と共有できる理論ではないかと考える。

そして、なぜこの極微な粒子が次第に集まってくるのかと言えば、これらは有情の行為と思考によって顕れ、どんどんと粗い宇宙へと生成されていくからである。宇宙が滅亡する時にも、最終的には極微な粒子に溶け込んでいく。極微の粒子の集まりによって外が出来上がり、そして衆生が出来上がり、世間と出世間の灌頂が出来上がり、極微の粒子の集まりから超越した状態になって、曼荼羅と本尊との概念的な觀想が消え去った時に、カーラチャクラの目的である「マハムドラーの智」を得る⁽⁶⁾。それがカーラチャクラの悟りである。ここで興味深いのは、すべては極微の粒子から始まって、最終的には極微の粒子の物質化を超越するという内容である。

さて、このカーラチャクラの灌頂や伝授についての内容を語るにあたっては、「シャンバラ」という地が深く関わってくるので、ここで言及したい。この秘境の地シャンバラについては、十八〜十九世紀にかけて、ヨーロッパやロシアの学者達が著作を残しており、チベット仏教においてもガイドが残されている。

厳密に言うシャンバラというのは、インドの北にあるシタ川の北、ヒマラヤの地域にあるとされている。そこにはカラパという大都市があり、そこに大きなカーラチャクラの宮殿があり、カーラチャクラの七人の法王と二十五人の王が存在するという。

この地は、さまざまな文献を検証すると浄土世界ではなく輪廻の一部であると考えられる。ちなみに、玄奘三蔵によると、シタ川は東トルキスタンのタリム川を指すともいわれている。

四 ダライ・ラマ十四世のカーラチャクラ伝授の変遷

ダライ・ラマ、世界平和の実現、シャンバラ伝説という三つの要因によってカーラチャクラの儀軌が注目と関心を集め、一九七〇年以來、灌頂には約百五十万人が参加し、その数はどんどん増加している。西洋・近代社会における参加者の多くは、世界平和に繋がるということ信じ、平和と安定を強く願って参加する傾向のようである。また、チベット人とヒマラヤ地域の人々にとっては、シャンバラとの関係という点も参加の大きな動機となっている。このような経緯から、徐々に世界中で灌頂を行うようになってきた。

ダライ・ラマ法王は、ラサのノル布林カにおいても、一九五四年と五六年に灌頂の儀式を行ったが、亡命後は一時的な社会事情でできなくなった。やがて一九七〇年、ダライ・ラマ法王の居所である北インドのダラムサラで、亡命先で初めてカーラチャクラの灌頂儀式が行われた。この時の参加者の多くはチベット文化圏の人々で、外国人の数は少なかった。一九七三年には、亡命チベット人による仏教団体とチベット人コミュニティの勧請により、ブツダガヤで行われた。釈尊成道の地であることから、ブータン、シッキム、ラダックなどから十万人以上の参加者があり、盛大に行われた。

一九八一年には初めて欧米の地、アメリカのマジソンで開催された。在住チベット人とアメリカ人で千五百人の参加があった。その後、一九八五年には在住チベット人の多い地域を有するスイス、引き続きオーストラリア、カナダなどの西洋各地でも行われた。

インドでは特にヒマラヤのラダック、スピテイといった地域を中心に十九回、西洋で十回、モンゴルで一回と、亡命後に三十回行われている。最新では、二〇一二年一月にブツダガヤで再び行われ、二十万人の参加者が集ま

った。

このようにカーラチャクラに関心が集まる理由はいくつかあろうが、ダライ・ラマ法王は、大乘仏教的なスピリチュアリティ（理念）を持って、大勢が共に参加し行動して、国や社会に向けて精神的に良い影響を与えることは、世界の平和に繋がっていくのではないかと述べている。

これらのプログラムは、すべて地域のコミュニティや仏教団体などの勧請によるものである。参加者は、民族、国、宗教にもとらわれず、一度に三十カ国以上の人々が集まることもある。もちろんチベット密教においては、灌頂受法にあたっては菩薩戒と三昧耶戒を守るのは基本であり、曼荼羅に入って見た内容を話してはいけないということがある。しかしダライ・ラマ法王は、灌頂に参加したからといって必ずしも灌頂を受けたことにはならない、参加に関してはあくまでも理念に関心がある人が条件であると捉えている。

ダライ・ラマ法王の灌頂儀軌は、基本的に砂曼荼羅を建立して行う。そのために専門の僧侶は二十人以上必要であり、三週間以上かけて進めていく。法話と儀軌に関しては、ダライ・ラマ法王自身が二週間から三週間かけて行う。

まずは、準備的な教えとして前行法話がある。参加者に仏教的な考え方を解説していくには、五日から一週間ほどかかる。その後、灌頂自体は三日間の儀軌となる。まず一日は準備的な灌頂儀軌であり、これには五時間ぐらいかかる。続いて、実際の七つの灌頂と四つの灌頂に二日間。この三日間は伝統的なチベット密教の儀軌通りに進められる。

前行法話は国や地域によって違いがある。西洋などでは時間が取りづらく三〜四日間、インドであれば一週間ぐらいかけて行う。ダライ・ラマ法王は、この前行法話を非常に重視している。なぜなら、参加者に大乘仏教的

な知識と考え方を説き示す大切な機会と考えているからである。仏教の枠組みと、大乘仏教の心構え、縁起や空といった思想を、時間をかけてできるだけわかりやすく説明すべきであると考えている。これには理由がある。多くの参加者は大乘仏教の考えに馴染んでいないことが多く、密教の神秘性に惹かれて集まってくるからである。伝統的な灌頂に関しては、ブツダガヤなど、伝統的仏教のある地域では詳しく行うこともあれば、西洋など、あまり馴染みのない地域では短時間で儀式的に行うこともある。短い時間の場合には、無上瑜伽タントラの細かい説明などは略されることもある。

その他の内容を挙げてみると、まず参加者の興味の一つとして、カーラチャクラの美しい曼荼羅が挙げられるだろう。密教の教えの中でも一番細かく精密な六輪の砂曼荼羅は、灌頂後に参加者も拝観できる。それを求めてやってくる人がいるのも事実である。カーラチャクラには、美しい曼荼羅、それに基づく仏教的なダンスであるチャム、声明、そして独自の占星術と天文学があり、チベット仏教とチベット仏教文化の伝統に大きな影響を与えている。

五 まとめ

チベット密教は、その代表的な教えの一つであるカーラチャクラという一種社会的側面を持ち合わせた内容によって、近代社会及び欧米社会と出会うことになったのだが、これは、ダライ・ラマ法王を含め大勢のチベット仏教徒が、五十年以上の長い年月をインドなどの亡命先で過ごし、彼の地で寺院などを建立しながら自らの文化と宗教と伝統を継承してきた活動の表れの一つとも言える。

同時に、一九七〇年代には先進諸国の若者達が、多くの戦争や民族紛争の結果として、世界平和やスピリチュ

アリテイを強く求めてアジアの国々にやって来たことで、さまざまな宗教間で東洋と西洋の交流が深まり、相互理解が深まるようになった。この世界の潮流に呑み込まれたのはチベットも例外ではなく、このような状況の中で、西洋社会にはあまり知られていなかった大乘仏教や密教の教えにも、特に西洋の若者達の関心が強まっていた。

こうした世界平和と心の安定を求める多くの人々に対して、ダライ・ラマ法王をはじめとする高僧達は、チベット仏教の立場から教えを伝え、貢献していくことができなかつたという思いを抱き、カーラチャクラの伝説、目的、神話的な特徴を根拠に、一九七〇年代よりダライ・ラマ法王が大勢に向けて伝統的な灌頂儀軌を行うようになった。そこには、普遍的であり国際的な目的として、世界平和や世界の安定ということがあり、そのために民族や宗教にとらわれず、大勢が参加するようになっていった。灌頂の儀軌においても、伝統と近代化の両方の側面を重視して行ってきたことで、さらに世界的に関心を持たれるようになった。

カーラチャクラの教えは他のタントラと違い、修行は個人の為だけではなく、有情の浄化の為だけでもなく、物質的な宇宙に何らかの良い影響を与えるという考え方を含んでいる。そういう意味で、まさしく今の時代に合った教えではないかとも考えられる。現代人の求めに合致する、近代のチベット密教を代表する教えなのである。

註

- (一) "Whereas the Buddha initially gave most of the tantrtras to individual disciples, the Kalacakra was from the outset given to an entire community, the citizens of the Kingdom of Shambhala. Subsequently, in Tibet it became customary for the initiation to be granted to great gatherings of people. I feel that introducing such a profound means of enlightenment in this way creates a

- strong bond positive among those who are present and so plants fertile seeds of peace.”. p.xii. The 14th Dalai Lama. *The Wheel of Time* - Sand mandala. by Barry Bryant. Snow Lion Publication, New York, 1992.
- (2) However, The Dalai Lama says, “It’s already become an open secret with many misconceptions, and it’s my responsibility to correct them. A profound explanation should be available.” p.10, *The Wheel of Time* - Sand mandala. by Barry Bryant. Snow Lion Publication, New York, 1992.
- (3) “One of the important features of the Kalacakra tantra is that it is given for a community…… This is the another reason why he feels Kalacakra is a teaching for our time.” p.25, *The Wheel of Time* - Sand mandala. by Barry Bryant. Snow Lion Publication, New York, 1992.
- (4) Khedup Norshang Gyatso: *Ornament of Stainless Light*, An exposition of the Kalacakra Tantra. Wisdom Publication, Boston, pp.5~11.
- (5) —do—, P.79
- (6) —do—, p.75.
- (7) <http://www.dalailama.com/teachings/kalachakra-initiations>
- 〈キーフレーズ〉
近代のチベット密教 チベット仏教の近代
カーラチャクラ
タンメン
- 参考文献：
Berbaum E. Marshall:
The Mythic of Journey and its Symbolism: A Study of the Development of Buddhist Guide book to Shambhala in relation to their Antecedents. University of California, Berkeley, 1985.
Barry Bryant:
The Wheel of Time. Sand Mandala: Snow Lion publication, New York, 1992.
Dalai Lama 14th & Hopkins, Jeffrey:
The Kalacakra tantra. Wisdom Publication, London, 1985.
Khedup N. Gyatso:
Ornament of Stainless Light. An exposition of the Kalacakra Tantra: Translated by Gavin Killy. Wisdom Publication, Boston, 2004.
Sopa, Lhundup & others:
The Wheel of Time, the Kalacakra in context. Snow Lion Publication, New York, 1991.